



営農NEWS



イネ縞葉枯病の育苗箱施薬による防除を徹底しましょう

県病害虫防除所では、本年2~3月に、県西・県南地域の水田畦畔等から採集したヒメトビウンカ越冬世代幼虫におけるイネ縞葉枯ウイルス（RSV）保毒虫率調査で、県西および県南地域で引き続き高い値の地点が多いことから

病害虫発生予察注意報 第4号「イネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の高い状態が続いています イネ縞葉枯病

の多発生が懸念されるため、薬剤の育苗箱施用によるヒメトビウンカの防除を徹底しましょう！」（令和2年3月24日）を発表しています。

筑西市や下妻市、結城市、八千代町、常総市など県西地域や、つくば市など県南の一部地域を中心として、既に縞葉枯病が発生している水田および周囲の水田に発生が認められるところでは、必ず下記を参考に、まずは**田植前に殺虫効果が長期持続する薬剤の育苗箱施用を実施して、媒介虫ヒメトビウンカの防除を行ってください**。また、前年、育苗箱施用を行っても発病が多かった地域では、6月中下旬に（防除適期については、今後、防除所より発表されます）ヒメトビウンカ幼虫を対象とした薬剤の本田防除も行ってください。なお、**育苗箱施用と本田防除の体系防除を行う場合には、ヒメトビウンカの薬剤抵抗性発達を抑えるため、箱施薬と本田防除で分類（IRACコード）の異なる薬剤を使用してください**。

1 縞葉枯病とは

本病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病です。イネが田植後の分けつ期に感染、発病すると、新葉が展開せずに「こより状」に垂れ下がり（ユウレイ症状）、枯れます。また、幼穂形成期以降に感染した場合は、出すくみや奇形穂となって稔実不良や不稔になります。なお、感染した株は、刈取り後のヒコバエ（再生イネ）で病徴が明瞭にあらわれ、これもヒメトビウンカの保毒源になります。

伝染環として、ウイルスを保毒したヒメトビウンカ老熟幼虫が水田周辺のイネ科雑草などで越冬し、その後、麦畑などイネ科植物などで増殖します。主に6月上~中旬頃からは水田に飛来し、イネにウイルスを感染させます。ウイルスは卵を通して次世代の虫にまで移行しますので、越冬虫の保毒虫率が高いと縞葉枯病の発生が多くなります。

2 防除対策

本田における発病株の抜き取りやヒコバエ（再生イネ）の早期耕起、水田周辺のイネ科雑草の除草など、耕種的防除を励行してウイルスの伝染源やヒメトビウンカ生息密度を常に低く抑制しておくが必要です。

薬剤防除としては、ウイルスの媒介虫ヒメトビウンカを対象に、**育苗箱に（薬効が長期持続する）殺虫剤を施用**することが最も重要です。

育苗箱施薬剤としては、ネオニコチノイド剤（IRAC:4A）の他、現在はウンカ類に効果が高く、長期残効のある新規の薬剤としてゼクサロン（成分名 ピラキサルト IRAC:4E）を含む各種薬剤が登場しています。

なお、育苗箱施用を行わない場合や行っても前年に発病が多かった地域は、本田防除として第二世代幼虫を対象に6月中旬~下旬頃に（防除適期については、今後、防除所より発表されます）薬剤防除を実施します。

表1 ヒメトビウンカ（ウンカ類）防除の主な水稻育苗箱施薬剤 （令和2年3月26日現在）

薬 剤 名		使用時期 / 使用回数	IRAC	FRAC
殺虫剤	フェルテラゼクサロン箱粒剤	播種時覆土前~移植当日/1回	28と4E	—
	ゼクサロンパディート箱粒剤	播種時（覆土前）~移植当日/1回、播種前処理		
	アドマイヤーCR箱粒剤	播種時（覆土前）~移植当日/1回	4A	
	フェルテラチェス箱粒剤	播種時（覆土前）~移植当日/1回	28と9B	
殺虫殺菌剤	防人箱粒剤	播種時（覆土前）~移植当日/1回	28と4E	P3
	スタウトダントツ箱粒剤	播種時（覆土前）~移植当日/1回、播種前処理	4A	P3

注1) 使用時期の欄：播種前処理は、播種前の床土または覆土に均一に混和处理を略しました。

注2) 縞葉枯病以外に、いもち病の常発地では、殺虫殺菌剤が有効です。

注3) IRACおよびFRACコードを記載しました。同一分類（コード）は作用点が同じなので、連用は避けてください。

注4) IRAC欄の4Eが新規の成分ピラキサルトを含む薬剤です。

各薬剤の取り扱いについては、お近くの農協に問い合わせてください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040